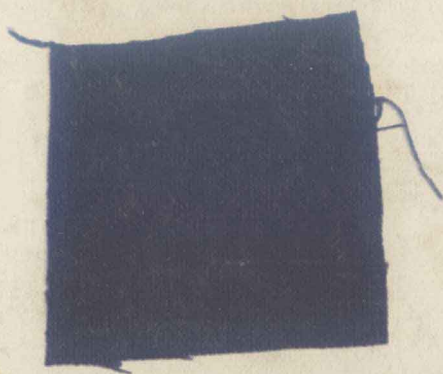


千曲川通信

中野實戲曲集



千曲川通信

中野實戲曲集

千曲川通信

—中野實戯曲集—

昭和三十六年二月二十五日発行

定価 四八〇円

著者 中野実 なかの みのる

発行者 車谷弘

発行所 文藝春秋新社

東京都中央区銀座西八ノ四
振替口座東京七八七四三番

印刷 大日本印刷

製本 辰嶋製本

目次

千曲川通信	五
禪 医 者	五一
W 氏 像	一〇五
午前二時の目撃者	一六三
ド ヤ 街	二〇七
河内山宗春	二五七
明日の幸福	三〇五
手 錠	三五五
Something happens	尾崎宏次 四一六

写 装
真 幀

宮 吉 佐
田 田 野
千 繁
博 秋 次
郎

千
曲
川
通
信

— 中野實戲曲集 —

千
曲
川
通
信

三
幕

登場人物

藤川源太郎	支局長	五十四歳
古田 次長		三十八歳
本 間	給仕	十九歳
玉 浦	モノタイブ	二十七歳
倉 橋	販売店主	四十八歳
松 尾	"	五十二歳
池 本	支局員	二十八歳
小 山	"	三十二歳
" まつ	武島の妻	四十五歳
" とき子	" 長女	二十四歳
" 春子	" 次女	二十二歳
武島 信子	" 三女	十九歳
田 辺	支局員	二十九歳
藤川 夏子	支局長の妻	四十九歳
武島精一郎	毎朝新聞通信部	五十三歳
笠 置	北日通信部	四十六歳
中西 光夫	支局員	二十四歳
中西 あや	光夫の母	四十八歳

鈴木 昭二 市会議長の息子 二十五歳

北 村 支局員

森 "

淡谷 幸子 春子の友達、岡本病院の看護婦

二十二歳

み ち 近所の娘

た け "

芳 造 近所の男

理 吉 "

広岡せつ子 四十九歳

了 然 西念寺住職 六十歳

時 現代 十月中旬

処 長野県

第一幕

第一景

ある新聞社の長野支局。

舞台は、その支局の内部。

中央は、支局の編集室である。支局長の机を下手に、六つばかりの机が並んでいる。東京直通の電話、他の支局との直通電話、普通電話、無線通信機、その他、マイクロホン、写真電送機、乾燥機など一切、新聞社支局の器材設備。

上手奥は玄関への出入口。その前寄りには、宿直室になっていて、シングルベッドが二段。玄関からは、二階へ上る階段。

編集室の下手は、モノタイプ室。さらにその下手は写真の現像室。

モノタイプ室のうしろは廊下になっていて、これは、支局長の住居へ通じる。舞台やや下手によせてテーブ

ル、椅子のセット。四方の壁には、関係各官庁その他の電話番号の紙、黒板、地図、編集方針の額などがかかっている。

宿直室にも、スタンド、電話機、懐中電灯、スキーなど

十月中旬の午後五時ごろ。

モノタイプ室では、玉浦がタイプのキイをたたいている。次長の古田が電話にかかり、ザラ紙に原稿を書いている。給仕の本間が別の電話にかかっている。

本間 はい。一寸待ってください。

古田 じゃあ、すぐ東京へ第一報を入れるからね。(切る)

本間 次長、支局長に谷さんからです。

古田 (その電話をとる) ああ、もし、もし。支局長は今販売店会議の方へ行って居るんですが、五時には帰る予定ですが……。ああ、どうも。

古田、その電話を切り、東京本社との直通電話にかかる。

古田 長野から、東京さん……。ああ、もしもし。火事的第一報です。そうです。(原稿をよむ) 十八日、午後四時五十分ごろ、下高井郡、小布施町、駒場、北信木材会社材木置場、責任者瀬川光広。光は光線の光、広は広島

広、四方より出火、火は忽ち燃え広がって、附近の農家に延焼中。大きくなりそうですから、二段に願いましう。あとすぐ入れますから。どうも。ありがとうございました。

電話を切り、ガラ紙に時間を書き入れる。その間に、また他の電話が鳴り、本間がかかる。

本間 次長、篠ノ井からです。

古田 はい。——はい。(またガラ紙に書く)

さらに、また、他の電話のベル。

本間 (かかろ) 小山さんから。

古田 (篠ノ井の電話をそのまま、小山の電話にかかろ) どうだい、火事は。大きくなつたか。え。消えちゃった？ そいつは困つたな。(苦笑い) じゃあ、書原だな。御苦労さん。(本間に) 君、篠ノ井とつといてくれ。

本間は篠ノ井の方に電話にかかり、古田はもう一度東京との直通電話に出る。

古田 長野から、東京さん……。ああ、今の小布施の火事ですが、すぐ消えちまつたらしいんです。ええ、そうなんです。どうもすみませんでした。ええ、書原で送ることになります。じゃあ、予定の三本ということ。どうも……。

古田の切った電話のマイクから、今度は、「松本から東京さん……」との直通の声がきこえてくる。そのとき、玄関から、支局長の藤川源太郎が、販売店主の倉橋と松尾をつれて出てくる。古田は本間の原稿に目を通す。

藤川 さ、どうぞお入り下さい。(古田に) 販売店の方が支局を見学したいんだそうだ。

古田 (二人に目礼をおくってから) 支局長、谷さんから電話がありました。

藤川 そう。(本間に) 君、お茶を。

本間 はい。

本間は、下手の住居の方へはいる。

藤川 (二人を案内して) こちらがモノタイプ室です。キイをたたいて居りますね。タイプにあの通り、小さな穴があいて出て居りますね。あれと同じものが東京の本社のタイプにうたれて、そのまま活字になって、出てくるわけです。

倉橋 テープがすぐ活字になるんですか。

藤川 そうです。電話で送って東京で原稿を書く時間と、活字を拾う手間とが全部省けるわけですね。したがって時間ぎりぎりいっぱいニュースが地方版にのるんです。もっとも、大きなニュースがあると、直通電話でおくる

こともありますが。

松尾 モノタイプをうつ人も支局の人ですか。

藤川 いや、あれは、印刷局から派遣されて来ているんです。それから、これが電送写真ですね。（スイッチを入れたりする）

松尾 写真班は……。

藤川 いや、写真班はありません。支局員がみんな自分で撮ってくるんです。こちらが現像室になっています。

倉橋 この器械は……（短波通信機をさす）

藤川 それは、無線通信機です。二台ありましてね。緊急の場合、たとえば山の遭難事件があったりすると、電話はありませんから、現地へ一台もって行って、ことと連絡をとるわけですよ。

その間に、本間が茶を淹れてもって出てくる。

藤川 さ、どうぞ。

倉橋と松尾は、下手の椅子につく。

そのとき、玄関から、支局員の池本と小山が帰ってくる。

二人は、おのおの机に向って、ザラ紙に向う。

藤川 （電話にかかると）ああ、もし、もし。災害対策本部？

毎朝の藤川です。谷さんにどうぞ。ああ、もし、もし。藤川です。電話だったそうですね。ええ、ええ。ああ、

それは明日うちの社でトップにします。そうなんです。伊勢湾の台風にすっかり持ってゆかれて、県下の開拓民の災害はすっかり忘れられてしまっていますからね。長野版だけでなく、本紙にものせて世論を喚起するつもりです。え、東新が……。そうですか。どうも有難うございました。いいえ。じゃあ、ごめん下さい。（古田に）君。災害地の写真はどうなった？

古田 （池本に）とって来た？

池本 ええ。これです。

藤川 すぐ現像してくれたまえ。

池本、写真機からフィルムを抜いて、現像室へはいる。赤ランプがつく。古田は池本の原稿に目を通す。

そのとき、武島まつと娘の春子が玄関からはいってくる。手に土産物をもつ。

まつ 今日は。

藤川 やあ。いらっしゃい。どうしたんです？ なにか事件？

まつ いいえ、この子が、銀行に勤めることになったんですから、支店長のところへ一寸御挨拶に……。

藤川 そう。あなたが支局へ現れたりすると、またなにか特ダネかと思うよ。

古田、小山笑う。

まつ まあ……。奥さまは……。

藤川 います。

まつ まだ浅いんですけど、野沢菜をすこし持ってきてまいりましたの。

藤川 それはどうもありがとうございます。

まつ 一寸奥さまに御挨拶して帰ります。

藤川 どうぞ。

古田 奥さん。本社から通信部に割当ての年鑑が来ていま

すから、帰りにもつて帰っていただけませんか。

まつ はい。(春子に) いらっしゃい。

まつ、春子、下手の住居へはいつてゆく。

倉橋 それじゃあ、支局長、あたしたちはこれで……。

藤川 そうですか。お構いも出来なくて。

松尾 支局長、さっきも会議の席上で云ったことですが、

安曇郡の記事もどしどし載せてもらわんことには、毎朝の販売店としても、競争に敗けてしまいますから、その

点ひとつどうか。

藤川 承知しました。通信部の方にもそう云って、せいぜい記事を送らせるようにします。

松尾 お願いたします。

藤川 どうも御苦労さまでした。

藤川、松尾と倉橋を玄関へおくり出す。

古田 本間君。年鑑十部、中野通信部。包んでおいてくれ。

本間 はい。(上手の階段へ上ってゆく)

玄関から、支局長中西光夫が田辺と帰ってくる。

田辺 次長。志賀高原に初雪が降ったそうですよ。

古田 そう。(藤川に) 支局長、入れましょうか。

藤川 そうだね。

古田 (田辺に) 去年の初雪はいつか調べてくれないか。

田辺、書類箱からメモなどを出す。

古田 (直通電話にかかると) もし、もし、長野、東京さん？

一本入れて下さい。志賀高原に初雪。(田辺の出すメモを見て) 去年より十一日遅れています。そうです。写真は

ないんですけども、ええ、そうなんです。日報さんみたいに去年の初雪の写真を入れるわけにはゆきませんしね。

じゃあ、お願いします。どうもありがとうございました。(切る)

この間に、現像室から、池本が出て、藤川にフィルムを見せる。

藤川 (すかしてみて) こっちの方がいいな。この流木でやられてる方が。

池本 はい。

池本、フィルムをもって再び現像室へ。中西はザラ紙に写っている。小山は、古田に見てもらった原稿をもって、モノタイプ室にはいる。

住居の方から、まつ、春子が出てくる。

まつ 支局長。奥さまから、なにか頂きものをしましたのよ。ありがとうございます。次長、年鑑を預いてかえりますわ。

古田 一寸待つてください。今取りに行っていますから。

藤川 おかけなさい。この娘さんは二番目でしたかね。

まつ そうです。市役所に勤めてる子の次です。

藤川 そう、そう。中西君。

光夫 は。

藤川 ちよっと。

光夫、原稿を古田の机において、椅子をはなれる。

藤川 奥さん。中西君と云って、今度新しく本社から赴任して来た支局長です。こちらは、中野の通信部の武島さんの奥さん。

光夫 中西です。

まつ 武島でございます。

藤川 こちらは、たくさんある通信部でも、この人の右に

出る奥さんはあるまいと云われているほど大活躍して居られる奥さんだ。

まつ え、まあ、大へん……。

藤川 いや、ほんとなんだよ。この間の台風の時も、溺れそうになった子供が大の尻尾につかまって助かったという記事で、支局長が部長賞をもらったのも、この奥さんの手柄なんだよ。それだけならただのニュースだけでも、もすこし泣かせてもらえないかって注文をつけたら、筆が立つもんだから、本紙にものつかったようなあんな立派な文章が出来たんだ。

光夫 僕もあの記事は、東京を出る前、読みました。じゃあこちらの奥さんがあの記事を書かれたんですか。

まつ いいえ。あたしはただ主人の原稿を読んだだけなんですのよ。

藤川 御謙遜でしょう。(春子に)お母さんが書いたんですね。

春子 (類笑む)

藤川 ともかく、内助の功たるや大へんもんだよ。泣いている赤ちゃんを紐で箆笥のかんに縛りつけておいて、電話で原稿を送ったという美談の持主だからね。

まつ 支局長、あまりおかからかいにならないでください。

藤川 からかってなんかいませんよ。田舎の通信部員の奥さんというものは、どんなに苦勞が多いものか、中西君のような幹部候補生には、薬になるから云っているんですよ。ははははは。

そのとき、藤川の妻夏子が住居の方から出てくる。

夏子 あら、武島さんの奥さん。まだいらしたんですか。まつ はい。支局長からなにか御褒美が出るそうですわ。藤川 そう。今日はその年鑑で我慢してもらいますかね。ははははは。

この間に、本間が年鑑を持って下りて来て、春子にわたし

夏子 あ、中西さん。今、立花さんが見えて、下宿のことね。前の人がまだ退かないからもう十日ばかり待ってくら

光夫 結構です。

夏子 でも、宿直室でいつまでも、ねえ、あなた。

光夫 いえ、宿直室でいいです。御厄介ですけど。

夏子 いえ、うちの方は些とも構いませんのよ。

その間に、池本が現像室から焼きつけた写真をもって出て、藤川に見せる。

藤川 (古田に) これを送ったら。

古田 そうですね。じゃあ、電送。

池本、電送写真にかかる。モノタイプ室から、小山がひきかえて机につく。そのとき、電話のベル。光夫出る。

光夫 はい、毎朝支局です。中野通信部？ 奥さん見えていますよ。代りますか。一寸待ってください。(まつに)

奥さん、武島さんからですよ。

まつ (電話にかかる) もし、もし。あたしです。え、事件……。はい、どうぞ。(サラ紙に書きはじめる) はい——はい。市会議員の自動車が、中学生三人を轢いて、二名は即死、一名は重傷ですね。はい——はい。運転手の氏名と年齢はわからないんですか。え？ 運転手が酔っぱらっていた……。

藤川 次長。東京。

古田 (直通電話に飛びつく) もし、もし。長野。東京さん？ トップに願います。酔っぱらい運転、中学生三名を殺傷……。

まつ 市会議員連は、渋温泉で、朝から芸者をあげて遊興中……。

藤川 (まつ子の書いた原稿を一枚一枚くりつつ) 中西君。君、応援に、奥さんとジープで飛べ。

一同騒然たる中。

第二景

長野から数キロほどはなれたある小都市。

舞台は、毎朝新聞通信部、武島精一郎の家。

中央に、八畳と四畳との部屋。下手は土間になっている。土間から、二階へ上る階段。八畳と四畳には、おのおの奥へ通じる襖と障子の出入口。

八畳には、手製の机、イス、机の上に電話機、机の後方の押入は現像室。濡縁を廻し、上手の庭に、菊、柿の木。下手は、小川をわたって、おもてへ出るようになってゐる。八畳の床の間には、人形箱、本箱、事務用品を収める棚など。囲炉裏が切つてある。入口に自転車二台。前景から二時間ほど後。夜になっている。

精一郎が電話にかかっている。一寸酔いが廻っている。

精一郎 ああ、もし、もし、次長ですか。武島です。中学
生を轢き逃げした運転手の氏名がわかりました。市役所
の運転手で、大原三郎、二十八歳です。そうです。住所
は下高井郡、一本木、そうです。本人が警察へ自首して

出たんです。自首したのは、事件後一時間ほど後ですが。
家内ですか。家内はその運転手の写真を手に入れてく
ると云つて出かけました。信日さんも東新さんでも、大分
その写真で苦労しているようですが、大丈夫だと思います。
え、ジープがまだそっちへ帰らない？ おかしいですね。
あの中西とかいう幹候さんがまだ取材に駆け廻っている
んですかな。まだ若いですからね。はははははは。でも
ね、次長。支局からわざわざ応援に来てもらうことはな
かったんですよ。まだこれでも僕は第一線の記者のつも
りですからね。え？ 一杯はいつているんじゃないか
って。酔つてませんよ。はははははは。あ、それから、
一本しめじの中毒の原稿は届きましたですね。そうです
か。じゃあ、写真がはいり次第届けます。猶ね、明日の
定時通話までに新しい情報がはいったらおくります。ど
うも。

精一郎、電話を切る。春子が二階から下りてくる。

春子 お父さん、のぶちゃんはまだ。

精一郎 信用組合で今日なにかあったんじゃないのか。

(囲炉裏のそばへくる)

春子 ああ、そうか。編物の講習会で遅くなると云つてい
たかな。姉さん遅いなあ。先に御飯たべようかしら。

精一郎 市役所へ勤めるようになってから、このごろあいつすっかり時間がルーズになってしまったな。いいから先にたべな。

そのとき、下手から、北信日報の記者笠置が出てくる。

笠置 今晩は。

春子 お父さん、北日の笠置さん。

精一郎 (四疊の方へ出て) なに。

笠置 市役所の雑賀課長来なかったですか。

精一郎 いいや。どうして?

笠置 例の自動車事故の一件で、大分あっちこっち揉消しに廻っているらしいんですよ。お宅へも来たかと思つて。

精一郎 来ない。

笠置 きつと来ます。

ね。事故のあったことは仕方
ドンチャン騒ぎをしていたこ
かつて云っているんですよ。
て、もう東京で刷り上つてし

は? (探るように)

いける)

かけています。なにか……。

月賦のことを聞いて来てくさ

と云つたもんですからね。じゃあ、おやすみなさい。

精一郎 おやすみなさい。

春子 おやすみなさい。

笠置 帰つてゆく。

精一郎 おい、春子。

春子 え。

精一郎 えじゃあないよ。北日も運転手の写真を探し廻つて
いるんだよ。白ぼつくて、お母さんがどこへ行つた
か探りに来たんだ。お前も新聞記者の娘だろう。ちつと
は頭をはたらかすもんだよ。むかしいくらこの辺は上杉
謙信の地盤だったからつて、敵に塩を送るような真似を
していたら、新聞社は潰れてしまいますよ。(ウィスキー
をのむ)

春子 お父さんはそう云つて、飲んでいればいいの?

精一郎 またへらず口をたたく。

そのとき、表から妹の信子が帰ってくる。

信子 ただ今、姉さん、お腹空いた……。

春子 いやな人ね。帰ってくるなり……。

信子 お母さんは?

春子 出かけている。

信子 お父さんの仕事で?